

Close-up Interview (5月号 表紙の顔)

小久保 実希

KOKUBO MIKI

「今年は全試合強い気持ちで投げたい。
『優勝したい』ではなく『優勝する』です！」

プロ11年目、28歳の小久保実希。4期・5年連続のシードプロとして迎えた今季開幕戦の関西オープンでは石田万音、坂本かやに次ぐ3位と好スタートを切ったが、今年はデビュー10周年の節目の年。上位常連の安定株から悲願のタイトルホルダーへ、さらなる飛躍を誓っている――。

(4月23日取材／カメラ：馬場高志)

◀「裸眼ではほとんど何も見えない」という小久保。試合では眼鏡がトレードマークだが普段はコンタクト。今号の表紙を見て「この人だれ!?」と思った読者も少なくないだろう。「チャレンジとかでもお客さんに『メガネ外したら?』と言われます(笑)」



▲試合中はゲームに集中して笑顔を見ることがほとんどない小久保だが、普段は明るくハキハキしたタイプ。本人曰く「けっこう頑固な性格」だそうだ

巻き返せたのはよかったですけど、あれがなかったら決勝に残れた可能性もあったので、悔しいですね」

明けて2024年。小久保は開幕戦の関西オープンで3位入賞と好スタートを切ったが、もちろん満足はしていない。今年はデビュー10周年の節目の年であり、20代最後のシーズンでもあるからだ。

「今年は全試合優勝するという強い気持ちで投げたいと思っています。『優勝したい』ではなく『優勝する!』です(笑)」

同期には通算6勝の寺下智香、同2勝の三浦美里という2人のタイトルホルダーがいる。「3人目は私」――小久保の決意に揺るぎはない。

取材協力：ジョイナスボウル

小久保プロと一緒に投げよう!
近日開催のチャレンジマッチ

- 5月11・12日 大阪・WAVE34
- 5月14日 長野・アピナボウル松本城山店
- 5月16日 埼玉・ビッグボウル杉戸
- 5月18日 茨城・ジョイナスボウル坂東店
- 5月19日 茨城・筑波スカイボウル
- 5月31日 茨城・ジョイナスボウル坂東店
- 6月1日 群馬・エメラルドボウル
- 6月2日 埼玉・ジョイナスボウル
- 6月4日 長野・アピナボウル長野篠ノ井店
- 6月8日 京都・キョーイチアミューズメントパーク吉祥院



こくぼ・みき／1995年7月26日生まれ、岐阜県出身。163センチ、右投げ。2014年プロ入り(47期/ライセンスNo.514)。公認パーフェクト1回。23年度ポイントランキング13位、アベレージ211.90。所属：ジョイナスボウル/㈱ハイ・スポーツ社



背水のプロ6年目に覚醒

本格的にボウリングを始めたのは高校1年のとき。当時住んでいた静岡県のセンターで、家族とハウスボールで投げているら、「たまたま隣でチャレンジマッチをやっていた男子プロの方に『センスあるね』と声をかけられて、ちょっとやってみる気になった(笑)」のがきっかけだという。

プロの目利き通り、上達は早かったが、アマチュアの競技団体には入会せず、当初はプロボウラーを目指す気もなかったそうだ。

「ボウリング業界のことを何も知らなかったし、ある人に『女子プロは稼げるよ』と言われて、軽い気持ちでプロテストを受けたんです(笑)。練習も、夏休みや冬休みに地元のセンターでアルバイトしながら集中してやって、あとは週一のリーグで投げ続けていたくらいでした」

それでも2014年度のプロテストに一発合格。ちなみに、成績は合格者14名中の7番目だった。

だが、生来のボウリングセンスだけで?プロになった小久保は、デビュー直後から壁にぶち当たってしまう。新人戦を含め、公式戦は下から数えたほうが早い順位で14大会連続予選落ち。3年目のラウンドワンカップレディースでようやく初賞金(総合33位で6万円)を獲得したものの、その後も低空飛

行が続き、「5年やってダメだったら辞めようと思ったこともあった」という。

背水の覚悟で臨んだ6年目の2019年、小久保は4月の宮崎プロアマオープンで初のTV決勝進出を果たし、3位入賞。7月の東海オープンでは優勝決定戦にまで駒を進めて準優勝と上



▲2019年、東海オープン準V当時の小久保。試合後には「すごく悔しいけど、この悔しさが次につながると思う」とコメントしていた(7月21日、星ヶ丘ボウル)

昇軌道に乗る。同年は順位決定戦の成績が振るわなかったこともあって10大会の出場にとどまったが、うち6大会で入賞し、ポイントランキング16位で翌年のシード入りを決めた。

「それまでセカンドシードに入ったこともなかったのに(苦笑)。何でジャンプアップできたんだろう?という理由が自分でも分からないまま、その年はずっと不思議な感覚で投げていました」

本人は覚醒のシーズンをそう回想するが、二度優勝に近いところまで行って勝ち切れなかった悔しさが飛躍のバネになったことは確かだろう。

節目の年に決意新た

以来、小久保は毎年コンスタントに好成績を挙げ、4期・5年連続でシード入り。いまだ優勝こそないものの、20年＝全日本女子プロ選手権3位、21年＝JPBA☆SSSカップ3位、22年＝大岡産業レディース&東海オープン4位、23年JPBA☆SSSカップ3位と、毎年必ず一度はファイナリストに名を連ねている。

「自分のボウリングに自信があるかといえば、正直あまりないですけど(苦笑)、打ると感じたときには『絶対250以上は打つぞ!』というスイッチの入れ方だったり、打てないときもなるべくローゲームを出さないで180、190でまとめるスペアの安定感が、最近はこちらに出てきたかなと思います」

昨シーズンも15戦して入賞10回、うちひとケタ入賞は5回を数える。

「いちばん印象に残っているのはMKチャリティカップです。5位でしたけど、それまでは予選落ちが多く、通過してもせいぜい20位くらいの大会だったので(笑)。ボールの選択や表面加工などもすべて自分で考えて、過去最高の結果が出せました」

予選のゲーム数が少ないB公認の大会での



▲今季開幕戦の関西オープンは3位フィニッシュ。石田万音も坂本かやも、初Vの悲願達成のために何としても打ち倒さなければならぬ存在だ(3月24日、ボウルアロー松原店)